

ある日のカフェ・シュトラッセのおはなし。
 平日の昼下がり、店内には静かに読書をしている女性が1人。1歳くらいのお子さんと3歳くらいのお子さんの、それぞれの母さん達の2人組みでした。お母さん達は久しぶりの再会に話も弾み、カフェにもあまり行かないそう、お菓子やコーヒを、「おいしいね おいしいね」と嬉しそうです。それにつられて子供達もきゅきゅと言いつつ、読書をしている女性を気遣ってかすかさず「しいい」。

そんな光景を思い浮かべてみて下さい。小さいお子さんのいるご家庭では、とかく、「この子、おちつきが無いから・・・」とカフェへ行く事をためらいがちです。その気持ちは有り難いのですが、むしろ、ためらわずに何度でもお越し頂きたいのです。この場面で「しいい」とされても、なぜいけないのかがわかりませんよね。

「あそこでご本を読んでいるお姉さんは、うるさくて読めないですよ？だから静かにしてようね。」
 こうして、何回か来店するうちに居合わせたお客さんも巻き込んで、お子さんはその場の雰囲気や、してはいけない事などを学ぶことでしょうし、それはこういう場だけではなく学べないからなのです。

カフェ・シュトラッセは私企業ですが、同時に「公器」でもあります。たとえお客様のお子さんであっても、私も含め居合わせている皆で「しつけ」の役割を担う事で、私たち自身も大人になっていく。
 その時どきで場面は刻々と変化するけれど、カフェにはそんな役割もあるんだと、私は思います。

本日は人の子でもガミガミ云える鬼ジジイになりたいんだ。

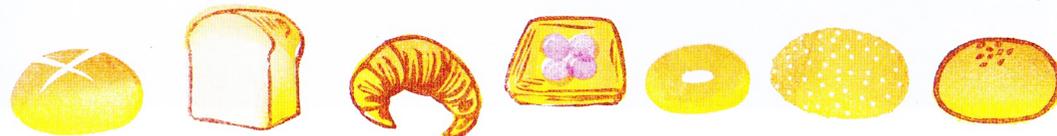
カフェ・シュトラッセ

<http://kaffee-strasze.blog.ocn.ne.jp/>

(児玉理)



今月のほんこ



 hankoya.noraneko@gmail.com

これからとお知らせ



☆カフェ・シュトラッセ

「5月と駅」小口裕康 田之上尚小 二人展
 5月1日(火)～6月1日(金)
 10:00～19:00※水曜日は12:00開店
 毎週木曜日と第三金曜日は定休
 Tel&Fax 0263-99-3685

季節の途中、旅の途中。「街道」という名前の素敵なカフェで展示会を行います。(小口)

☆スタイル・ガレ



「素朴な日常に」陶・木工展
 5月19日(土)～5月27日(日)
 10:00～17:00 会期中無休
 (定休日 木曜日)
 スタイル・ガレ
 Tel&Fax 0263-99-2492

内川千代水(陶)/藤牧敬三(木工)/常設展示・上條陽子

日々使うモノだから 心地よいものに囲まれて 自分が選んだモノヲ大切にしたい。
 使うたびに生活に溶け込む道具たち。一つひとつゆっくと・・・

※詳しくはそれぞれお電話にてお尋ね下さい。

朝日村つくりびとのブログも見てみて下さいね!
<http://asahinobijyutsukan.blog136.fc2.com/>

夜のさんぽのバックナンバーもこちらから読めます!

夜のさんぽ

朝日村の創っている人が作っているフリーペーパー

2012年 5月号(vol.4)

このフリーペーパーを創っているひとたち

藤牧 敬三(クラフト)/下田ひかり(現代美術)/児玉 理(自家焙煎珈琲)/やぎさなおみ(消しゴムはんこ)
 表紙の写真/百頭たけし(web写真家)HP 山ヲ煮ル・・・<http://d.hatena.ne.jp/hyakutou/>



ウインザーチェア制作

昨年6月、東御市で開催された「村上富朗さんの100脚展」で村上さんの椅子に出会ってからウインザーチェアを意識して制作するようになりました。それまでも猫脚ウインザーなど何度か制作したことはあるのですが、美しい椅子をもっと追求してみた。昨年からはあらためて椅子づくりを模索しているところだ。

ウインザーチェアとは、無垢の厚い座板に丸棒状の脚・背もたれが組み込まれて構成された椅子を総称して呼んでいますが、元々はイギリス発祥でそれが各地に渡りさまざまなスタイルでリメイクされています。

村上さんは20代のころ渡米しアメリカンウインザーチェアに出会い、また家具製作を経験し、帰国後椅子作家として数々の美しい椅子を制作・発表してきましたが、昨年7月、62歳の若さで急遽されました。村上さんの椅子の大きさ・美しさ・厳しさ全てが反映された作品に少しでも近付きたく、現在取り組んでいるところだ。

今制作している椅子は、軽いこと・素朴なこと・美しいこと、と大まかなイメージを決めて企画・制作に入りました。

素材は厚み45・35・27mmのタモ材と24mmのトネリコ材を使用し、全ては製材された十分に乾燥された平板から加工が始まります。まずは脚・背もたれになる材を24・27・35mmの角棒に加工し乾燥させます。また座面板になる35mmの板の平面を出し、板を接ぎ合せ接着します。背もたれの一番上の笠木は45mm材を背もたれのカーブに合わせて弓なりに成形します。ここまですが大まかな準備段階で、ここから繊細な部材加工が始まります。

あらかじめ企画段階で描いた原寸設計図(平面・側面・正面図)を基に接合部のホゾと穴の加工をそれぞれしていくのですが、全ての接合部が正面から見て〇度、側面から見て〇度と3次的に立体構成

されているので、ひとつ一つの穴のあけ方・ホゾのつくり方が違います。また傾斜角が付いた穴あけは誤差が出易く、バリ(切削によるメクスレ)も起きやすいので神経を使う作業になります。脚・背もたれの丸棒状になる材は4角から8角に成形し、この丸棒を使い8角・16角・丸状にしていきます。

座面板も数多くの穴加工されたのち、外周を成形し座り心地が良く、また美しく見えるフォルムに鉋を使って造形していきます。各パーツが鉋によって綺麗に仕上がった段階で、組立に入ります。ここでも、組立の手順などシミュレーションした後、スピードと正確性を持って組立上げていきます。

細いパーツでも色んな角度をもって立体的に構成されることで、強度が増していきます。ウインザーチェアの特徴である丁寧な加工された多くのパーツによって構成された立体造形。また自分の五感をフルに使って生み出される生活道具としての椅子。この椅子がどんな人の手に渡り、どう感じ、どう使われていくのか、とても奥深い仕事と 생각합니다。

お知らせですが、「村上富朗 木の椅子展」5回展が4月29日〜5月2日まで市民芸術館2階シアターパークで開催されます。(村上さんの作品が集まる最後の機会かと思えます。)また、6月10日まで松本市美術館で開かれた「モダンデザインの精華」に昨年制作した自身のオリジナルのウインザーチェアが展示されています。この機会に是非、クラフトに触れてみて頂きたいと思います。

スタイル・ガレ <http://www.stylgale.com/>

(藤牧敬三)

絵を描くこと

私は職業が画家、もしくは美術家という事になるのだけど、そう聞くと「好きなことを仕事にできて良いね」と結構な確立で言われるし、確かに幸せな事だと思われこの「好きなこと」というのに違和感がある。というか、「好きだから」絵描きになれたわけではなく、と断言できる。そして、今現在絵描きをしている事に驚いている。絵描きになれた一番は、「執着心」と「承認欲求」、「コンプレックス」だろう。

もちろん絵を描く事は好きだ。だけれども、同じ「好き」であれば、中学の部活でやっていた合唱も相当好きだ。何でもそうだけれど、長く続けていれば伸び悩んでスランプにもなるし、辛い時もある。私にとって絵を描く事は、多分制作の8割はこの状態である。そして、保育園の頃から20歳まで感えていたのは、自分が絵に対して思っていたのは、自分が他者より劣っているというコンプレックス(劣等感)と、それでも誰かに認めて欲しいという強烈な承認欲求と、描かなければどうしようもない、という執着心だった。この辺の経緯は話すとき長くなるので省略する。

別に同情を引こうというのではないし、この経験がことさら辛かったとかそういう事でもなく、絵を描く事が嫌いでもない。短大卒業後、私は自分自身の為に、絵を描く事と向き合わなければいけない、と気がついた。ここで



気がつかなければ、多分一生後悔してただろうと思う。自分に才能があるかどうか、力があるかどうか、直視するのはすごく勇気がいる。直視しても自分の足り無さに愕然とした事も。でも私は、向き合った事で自分の中で多くを占めていた自分の心の醜い部分やどうしようもなく辛い部分を昇華できるようなった。結局、絵で自分は救われたな、と思う。絵を描いて認められる事で、自分の存在価値を確かめられた。それで生きる事が本当に楽になった。今までは、自己嫌悪の塊だったから。

そういう経緯を考えてみると「好きなことを仕事にできる事は、幸せ」である。今までの経験があるから、現在がある、今の作品に繋がっている。私の生きてきた全てが、作品になっっているなと最近よく思う。

絵は才能だとか言う。劣等感もコンプレックスも執着心も、あまりプラスに捉えられる事は少ないと思う。けれど、ここから生まれるパワーは凄く、そこから何を目標している、こうい感情を持っている人こそ、向き合った時は強くなるのではないかな。ぜひ、腐らないで強くなりたい。

(下田ひかり)

<http://nikatshimoda.com/>

言葉にならないう形のほし(2014) vol.1.4

